ネガイゴトはありませんか？

二丁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ネガイゴトはありませんか？

【Ｎコード】
Ｎ６３８９Ｐ

【作者名】
二丁

【あらすじ】
「三つの願い」ネタのショートショート

（前書き）

ネガイゴトはありませんか？

担当からの電話に怯えながら、俺は頭を掻きむしった。締切りはとうに過ぎている。唇を引きつらせる担当に拝み倒して少しだけ伸ばしてもらったのだった。けれども延長期間の三日も、もう二日過ぎてしまった。たった十枚のショートショートがどうしても書けない。アイディアがまったく浮かばないわけではないのだが、どれもこれも自己嫌悪に陥るような酷い物ばかりで、到底小説にできるとは思えなかった。そんな悠長なこと、言っている場合ではないのだが――

もう駄目だ。

いや、駄目だろうがなんだろうが、どうにかしなければいけないのだ。だいたい今度が初めてのことではない。筆が人一倍遅い俺はこうやって度々担当に迷惑をかけては白い目で見られていた。それでもなんとか書いてきたじゃないか。

――次はもうちょと、早くお願いしますよ。

数ヶ月前に言われた嫌味をまた思い出す。俺は洗面所に行くと氷のような水に顔をうずめて気合をいれた。

たったの十枚、調子が乗れば半日の仕事だ。

俺は空々しく鼻歌を唄いながらデスクに戻った。わざとゆっくりエディタを立ち上げる。

さて、ショートショートでよくあるテーマに「三つの願い」というものがある。悪魔かなにか知らないが、とにかく怪しい連中が現れて三つの願いを叶えようと提案する、という筋書きだ。星新一によると、ネタに困ったらこのお題を考えるのが一種のコツのようなものらしい。俺もあやかってみようではないか。俺は眼鏡を外して目を閉じた。わざとらしく目頭に力を込める。気のせいに決まって

いるのだが、どこからか担当に見張られているような気がして、つい芝居がかった仕草をしてしまう。一時間ほどそうやって唸ってみたのだが、さっぱり成果はあがらない。そのうち目頭が痛くなる。馬鹿らしくなって目を開けると一度エディタを閉じた。

手っ取り早くネタを作るには、実体験を元にするのが一番楽だ。悪魔、俺のところにも来てくれないかな――

ぼわんとシンクにお湯をかけてような音がした。振り返り、俺は腰を抜かした。

「な、なんだよお前！」

見たことのない巨人が俺を見下ろしていた。

「先日あなたに助けて頂いた犬です。その節はお世話になりました」

「犬？」

そう言えば、と俺は回想する。確かに一昨日、気分転換に散歩に出かけたとき犬を見かけた。茶色い毛並みの雑種犬で、首輪がなかったからたぶん野良犬だったのだろう。なんとはなしに眺めていると、犬が足を引きずっていることに気がついた。妙な角度に関節が曲がっている。

事故にでもあったのか、と思いながら通りすぎようとしたのだけれど、ふとした気まぐれを起こして近所の動物病院まで運んでやったのだ。そうか、あの犬か。

「あの足が折れた雑種犬？」

「思い出していたけましたか」

犬はにっこり笑った。けれどその姿はどう考えても犬には見えなかった。人型なのは、まあ百歩譲っていいとしよう、動物が人の姿になって現れるのはよくあるお噺だ。だが――

身長は百八十センチほどだろうか。筋肉隆々の肉体美をはた迷惑に公開しながら腕を組んでいる。パンツとは言わないから、せめて腰布くらいは身につけておいて欲しい。

肌は墨で塗ったように真っ黒だ。背中から灰色の翼を生やし、頭からは角が二本付き出していた。犬というより悪魔のようだ。

「それで、なにをしに来たんだ？　今お前の相手をしている暇はないんだが」
「冷たくしないでくださいよ。お礼をしに来たんですから」
「礼？　菓子折りなら東京バナナがいいな」
「あなたの願いを三つ、叶えて差し上げに参りました」
犬は俺を無視して言った。ある程度予想はしていたのだが、俺は間抜けた返事をしてしまった。
「三つの願い？」
「そう、ショートショートでよくある三つの願いごとです。さあなんでも言ってください。力になりますよ」
犬はそう言うと「ふんっ」と気合を込めて筋肉を膨らませた。意味が違う気がする。
「そうだな、じゃあネタをくれ。締切りに追われて困ってるんだ」
「ほう、小説のネタ。お安い御用です」
犬は深く息を吐きながらサンドチェストをした。手を組んで胸を強調するあれだ。
「おお、おお……おおおおお！」
電流が走った。
これだ、これならいけるぞ！　まいったなあ、こりゃ担当も驚くぞ。編集部の連中も俺を見直すに違いない。
「どうです？　ビビッときたでしょう」
「俺は天才だ！　ノーベル文学賞は俺のものだ！」
「それはそれは、今度の発表が楽しみですね」
犬は満足そうにダブルバイセップス・バックをした。俺は椅子を蹴飛ばしてエディタを立ち上げ、夢中でキーボードを叩いた。見てろよ担当、今度の雑誌は完売だ。これが話題に火を点け、俺の既巻は増刷に次ぐ増刷！　ついに百万分を超え印税収入はン億円、近い将来俺は長者番付に名前を載せる。あ、領収書あんまり保管してないぞ。税金対策どうしよう――
「それで、次の願いはなんでしょう？」

電子メールで原稿を送り一息ついたところで、犬はラットスプレッド・フロントをしながら言った。そんなに見せたいのか？
「次か？　そうだな――」
――しばらく旅行に行ってないな。
俺は昔から旅好きで、大学時代はよく貧乏旅行をしたものだった。卒業したから、がむしゃらに仕事をした。無名の新人にのんびり旅行などする暇はなかった。
「どこか遠くに行きたいな。静かなところがいい。こう、自然が多いところでさ。釣りもできれば言うことないな」
「判りました。では行きましょう」
アドミナブル・アンド・サイをすると、犬の体は怪しい光を放ちだした。眩しい、と思うまもなく俺の意識は遠のいて言った。
「さあ、着きました。起きてください」
ゆっくりと瞼を開けると、犬のモスト・マスキュラーが目に飛び込んできた。気持ち悪いのを通り越して恐怖を感じる。
「へえ……」
辺りを見渡すと、思わずそんな言葉が零れた。俺はどこかの山にいるようだった。空気が綺麗だ。気のせいか、甘い味がするような。
「空気の構成要素が、地球とは違うんですよ」
「え、ここ地球じゃないの？」
「まだ人類が発見していない、とある惑星です。大型の生命体は存在していませんが、命は溢れています。そこの湖では釣りもできますよ」
犬の指差す方を見ると、大きな湖が広がっている。ボートを浮かべれば気持ちがいいだろう。ご丁寧に岸に釣り道具が用意してあった。見たことのない魚が高く跳ねた。
「――うまいな、ここの魚は」
もう日が暮れていた。時計がないので判らないが、半日以上は遊んでいたように思う。
「そうですね、私も初めて食べるのですが、これはなかなか」

律儀にポーズを決めながら犬は焼き魚に食らいついてた。疲れないのだろうか。俺は焚き火に手をかざす。こんなに遊んだのはいつ以来だろう。心が洗われた。思わず涙が零れる。
「――そろそろ帰ろうか」
「はっ？　もう飽きたんですか？」
犬は驚いて腕立て伏せを始めた。もう慣れたので気にしない。
「いや、そう言うわけじゃないけどね。こういうことはたまにやるから良いんだよ。次の原稿、書かなきゃな」
俺は腰を上げた。名残り惜しいが、仕方がない。
「しかしですね、その……」
「ああ、判ってるよ」
欠伸をしながら俺は言った。
「三つ目の願いになるんだろ？　金が欲しいと言ったら危険な場所に連れていかれて、帰してもらうのに二つ願いを消費してしまうお約束のパターンだ。締切りもしのげたし、こんな楽しい思いもできたから、俺はもう満足だよ」
「いえ、私が言いたいのはそういう事ではなく……」
犬は腕立て伏せを止めた。
「あなた、帰れないんです」
「え？」
「だって、もう三つの願い事、全部使っちゃいましたから」
私は唖然とした。帰れない？　三つ目がもうない？
「悪魔に来て欲しいって、お願いしたでしょう？　誰が好き好んでこんな格好で人前に出るもんですか」
困った人だ、と言いたげに犬はサイドトライセップスをする。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6389p/

ネガイゴトはありませんか？

2010年12月22日07時10分発行